

重修聖徳院碑

左の碑文の 真言宗高野派管長大僧正密門宥範篆額
解 説 高野山大乗院住職 權中僧正 松橋慈照撰並びに書

神戸は、北に緑生い茂る山を背にし、南は碧海に臨み、種々の船や人々が日に日に数をましている、まことに刻々と姿を新たにしていづく地域であった。明治庚寅（明治二十三年）の春、高野山大乗院の先師諦仁阿遮梨はこの地を占つてよしとし、南山の一院を移し、世を救済するための道場にしようと思つた。これが聖徳院である。何年もたたないうちに先師は逝去され、一方堂宇はまだ完成されていないままであつた。それ以来その状態で数代を経て、私の代に至つた。私はいつてもこの院を興隆し先師の大願を成就しようと思ひ、いささかなりとも仏恩の一分に報いたいとひそかに機縁の熟するのを待つていた。大正のはじめ、漸くにして十分に機が熟し、そこで檀信と企画して、日夜たゆまずこの事業に取り組んだ。しかし、私はたまたま宗学の職務に抜擢された。赴任しようとするとき懇ろにこの事業を学兄の岡田實範僧正に委嘱した。實範僧正は、学識が深く、徳が高く、意思が堅剛で屈することがなく、決断力に富んでくじけることがなかつた。私の志を受け継いで院を経営し、三年間の辛苦の末に初めて院の完成をみた。本堂、坊舎、門牆の新築は整然として、壮大であざやかな美観をなしていた。真実これは衆生が仰いで信仰する靈地である。今年己未（大正八年）の春、高野山管長密門大僧正に恭しく委嘱し、落慶供養の式典を挙行した。この栄耀と幸運にどうして加えるものがあるうか。いささか大略を記して、そこで銘をつくる。

一塵の 構嶽となり 一滴の 深海となるごと ちりとしづくのしたがひあつまり いできし聖徳院
神戸の都を飾りたり 金剛の分身 そのみ姿を大通りにふり散らし 真言の 庫を開き
聖徳の 弘く敷かれゆくごと 聖徳院はいや栄えゆかん

重修聖徳院碑

真言宗高野派管長大僧正密門宥範篆額
高野山大乗院住職
權中僧正松橋慈照撰并書

神戸之地也陰負緑山陽臨碧海艦船曝曜生齒日繁誠是日新之域也明治甲寅春大乗院先師諦仁阿遮梨卜於此地移南山之一院以爲濟世道場即聖徳院是也莫不幾戴叩師逝焉堂宇未完爾來程數也至予予常意興隆斯院以成先師鴻願聊欲酬佛恩一分竊待機縁大正之元漸而純熟乃與檀信現晝日夕不息然余也偶擢宗學務將赴任即懇囑此業於學兄實範僧正兄也學深德高堅剛而不屈果毅而不撓繼余志程營苦辛三載始完成本堂坊舎門牆之新築烈然翰與之美盡其實是衆遊仰信靈境也今茲己未春恭晤高野山管長密門大僧正舉落慶供養之式典榮幸何者加之哉聊記梗概乃爲之銘曰

一塵構嶽 一滴深海 埃涓委聚 畫飾神都
金剛分身 散影康衢 真言闍庫 聖徳弘敷

高さ九尺、中四尺の御影石のこの石碑は裏滝道にあつた旧聖徳院の境内に建立されてきました。